

### 3 夫立ち会い分娩における助産師のケアを考える ～夫への関わりに焦点を当てて～

関西労災病院

足立有香

兵庫県立総合衛生学院 助産学科

奥陽子

#### I. はじめに

夫立ち会い分娩は、出産の喜びを夫婦で分かち合いその後の育児への興味、関心が得られるなどのプラス面がある一方で、夫が無力感を感じるなどのマイナス面も指摘されている。

学生の時、受け持ったK氏は、夫の付き添いのもと、立ち会い分娩を体験された。出産後、夫にバースレビューを行ったところ、立ち会い分娩を肯定的に受け止める言動がある一方で、否定的な感情も見受けられた。

そこで私は妊娠期、分娩期、産褥期に行った夫への関わりを振り返り、夫立ち会い分娩における助産師のケアを考える機会を持つことにした。

#### II. 研究方法

##### 1. 研究方法

立ち会い分娩をした夫への妊娠期、分娩期、産褥期における私の行った関わりについて、郷田ら<sup>1)</sup>の示す「夫立ち会い分娩における助産師のケア」4項目(表1)を基に振り返りを行い、具体的なケア内容を考える機会とした。

表1 夫立ち会い分娩における助産師のケア

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 夫が無力感を持たないようなケア</li><li>2. 夫婦のバースプランが叶えられるようなケア</li><li>3. 状況に合わせて夫が休息できるようなケア</li><li>4. 分娩の安楽が保てるようなケア</li></ol> |
|---|

郷田佳奈子, ほか: 夫立ち会い分娩における助産師のケア  
山梨大学看護学会誌7巻-1号 p33-38 2009 引用

##### 2. 倫理的配慮

今回の事例をまとめるにあたり、匿名性の保証と知り得た情報はこの研究以外に使用しないことを説明し、同意を得た。

#### III. 事例紹介

1. K氏、30代前半、初産婦、夫と二人暮らし。
2. K氏の出産育児行動: 両親学級全てコース受講、育児書を読み意欲的な学習姿勢で妊娠期を過ごしていた。
3. 夫の出産育児行動: 家事に協力的であり、立ち会い分娩を希望されていた。妊娠中から見のことに興味関心をもっていた。
4. 妊娠経過: 全期間母子ともに順調な経過を辿った。
5. 分娩経過: 分娩日までに規則的な腹部緊満感があり2回来院されるが、いずれも前駆陣痛のため帰宅された。妊娠38週6日、陣痛発来にて入院、分娩は順調に進行し、2890gの男児を正常分娩された。アプガースコア1分後9点/5分後10点、分娩所要時間11時間21分(活動期所要時間約7時間)、夫は全分娩期間付き添われていた。
6. 産褥・新生児経過: 母子ともに順調に経過し、産褥5日目に軽快退院された。

#### IV. 結果

立ち会い分娩をした夫への妊娠期、分娩期、産褥期における私の行った関わりを、時期ごとにまとめた。

## 1. 妊娠期

妊娠34週に夫婦それぞれにバースプランを記載する用紙を渡した。

妊娠36週、夫婦のそれぞれが記載されたバースプランを確認しながらプランを具体化していった。K氏は「陣痛の痛みが怖い」、「早く産みたい」、「夫といるときが一番安心、だからお産の時は夫に側にいてほしい」という記載や発言があった。K氏の痛みに対する不安については、分娩期の過ごし方や、産痛緩和法や弛緩法を具体的に示していった。するとK氏から、分娩室ではこんな音楽が聞きたい、普段使用している枕を使いたい、陣痛室では静かに過ごしたい、などの希望が出てきた。K氏には予定日の近い妊婦と交流する機会を意識的に設けたり、陣痛室や分娩室の見学、育児技術の練習を行うなど、分娩をできるだけイメージできるよう関わっていった。夫のバースプランには「妻の痛みを軽減する方法を知りたい」、「話し相手になりたい」などが記載されていた。それに対して私は手書きで返事を返し、バースプランを叶える具体的な方法を示したリーフレットを作成し、夫に渡した。

妊娠38週6日10時、前駆陣痛で夫に付き添われ来院された時、そこで初めて私は夫に直面した。K氏は夫に「家に帰る事になっちゃったよ」と話しかけており、夫はそれを冷静に受け止めている様子であった。私は入院がもうすぐであることを伝え、夫婦を温かく迎え入れることをアピールした。

## 2. 分娩期

### 1) 陣痛室

妊娠38週6日21時、K氏は陣痛発来し夫に付き添われ入院となった。活動期に入るとK氏は陣痛発作毎に「痛い痛い、また陣痛きたー」と声を発し痛みを訴えるようになった。私は妊娠期に提示し練習していた産痛緩和法と弛緩法を夫にも理解しやすいような説明を加えながら実施した。夫はベッドに座り込み、腰をさすったり、積極的にケアを行っていた。私はそれらを行いやすいよう夫の居場所を整え、夫のケアを褒め、さらによりよい方法を助言した。K氏は夫に「側から離れないで」「マッサージをやめないで」と言っ

た。さらに進行が進むとK氏の痛みを発する声は大きくなり「もう駄目かも、お産出来ないかも」という発言がみられた。しかし夫は「大丈夫、頑張れるよ、仕事でも徹夜して頑張っていたし、大丈夫だよ」となだめるように声をかけていた。私は夫に、夜間入院であることや、ケアを休みなく長時間されていたことから、休息を促す声かけをした。しかし夫は「大丈夫です」と言い、休憩をとることなくケアを続けていた。私は、夫が付き添いたい気持ちと、二人で過ごす時間を大切にしたいと考え、観察や声かけを行いながらも側での見守りを中心としたケアを行っていた。

### 2) 分娩室

K氏の子宮口が6cmに開大した頃、K氏に努責をかける様子がみられはじめ、内診を行うと子宮口は全開大、St+2のため分娩室へ慌ただしく入室することになった。夫も一緒に来てもらうよう声かけを行ったが、それまでK氏をなだめるように声かけをしていた夫の態度は一変し、自ら声をかけることもなくこわばった表情で分娩台から離れてK氏をみていた。側に寄って手を握ることを勧めたが側によろうとしなかった。私はその状況に気づきながらも分娩介助に集中しがちになり、K氏への関わりが中心になってしまっていた。

### 3) 分娩後2時間

児が出生し出生後ケアが一段落した時点で、夫に児を抱っこしてもらった。夫の顔はほころんでいた。この2時間は希望する音楽を流し、家族3人で過ごしてもらった。この時の夫は、緊張も解け、自らK氏に話しかけたり児を抱っこするなどの様子がみられた。

## 3. 産褥期

産褥3日目、夫婦に聞きとりと記述式のバースレビューを行った。

### K氏

「無事に産まれて満足です」

「主人が側にいてくれてよかった」

夫

「赤ちゃんが元気でよかった」

「陣痛の間隔が短くなるにつれて痛がる妻をみると  
つらい気持ちになった」

「急に分娩室に入ることになり運ばれる時に不安を  
感じた」

## V. 考 察

郷田ら<sup>1)</sup>の示す「夫立ち会い分娩における助産師のケア」4項目(表1)に基づいて、私の行った関わりを振り返りたい。

### 1. 夫が無力感を持たないようなケア

郷田ら<sup>1)</sup>は「助産師は“夫もケアの対象”として夫も役割を持つことで無力感をたせないようなケアを大事にしている」と述べている。

分娩期における夫の役割の提示、状況にあったケアの具体的方法の提示や助言は、夫の役割認識や参加意識を高め自己の存在価値を見いだせたと考える。妊娠中から行っていた分娩期における夫の役割の提示、ケアの具体的方法の提示は、その効果をより高めたと考える。

助産師が夫のケアを認めたり褒めたり、時に見守ることは、夫に自己効力感をもたらし、ケアの手技や頑張る意欲を向上させることにつながったと考える。また、K氏が夫に「側を離れないで」と言ったように、K氏が夫にケア継続を求めることにもつながっていく。このケアも、自己の存在価値をみいだすことにつながったと考える。

陣痛室で夫の役割を担える居場所を整えたことは、夫の安心や疲労を最小限にすることにつながり、夫の役割を担いやすくしたと考える。これらのケアの提供により、夫は無力感を持つことなく過ごすことができたと考える。

しかし、急な分娩室入室で夫に十分な関わりを持つことができなくなったときに、夫は無力感を感じる体験をされている。その様な時もこれらのケアが提供していけることが今後の課題である。

### 2. 夫婦のバースプランが叶えられるようなケア

「夫といるときが一番安心だからお産の時は夫に側にいてほしい」これがこの夫婦にとって何よりの希望であった。私は、分娩進行状態や夫婦の関係性を観ながら、“二人の時間”をできるだけ作るようにした。

郷田ら<sup>1)</sup>は「助産師は夫婦の状態をよく観察し、夫婦が助産師にどのように望んでいるかを見極める」ことが大切であると述べている。

K氏にとって夫に一番側にいてほしかった時期は入院まもない時期と、そして活動期に入ってからの痛みの強い時期であった。バースプランは夫婦が一番それを必要とする時期を見極め、その時期に叶えられるよう関わるのが大切であることがわかった。

### 3. 状況に合わせて夫が休息できるようなケア

私はバースプランで確認した、二人で過ごしたい気持ちを大切にすることを優先した結果、休息を促す声かけはしたがそれは十分ではなく、結果夫は十分な休息はとれていない。分娩第1期の平均所要時間を考えると夫の休息への配慮は大切であり、今回のような夜間の入院、活動期が長引いた時はなおのことである。体の疲労は精神的な疲労も招くことも考えられる。

声かけを行うタイミングは陣痛に耐えている産婦の目の前を避けることや、K氏に休息を勧める時に同時に夫にも休憩を促すことや、休息は夫婦で話し合ってもらい決定していけるような声かけも大切であり、これらが実行できていれば夫により休息を促すことができたのではないかと考える。

### 4. 分娩の安楽が保てるようなケア

K氏は妊娠中から痛みに対して強い不安をもっていった。それに対して、産痛緩和法や弛緩法の具体的方法の提示は大切であるが、イメージリーやラマーズ法など、痛みの閾値を下げる関わりを持つことが、必要であったと考える。

産痛の増強や、産痛の位置の感じ方の変化は分娩進行を表わす所見である。産痛に対しては、産痛緩和法の実施のみならず、産痛を肯定的にとらえられるような説明がもっと必要であったと考える。夫のバース

レビューの「陣痛の間隔が短くなるにつれて痛がる妻をみるとつらい気持ちになった」という発言からK氏が安楽にいられるようなケアは夫にとっても大切であると痛感した。

#### 5. 郷田らの示す4項目以外のケア

夫のバースレビューの「急に分娩室に入ることになり運ばれる時に不安を感じた」という発言から、この時期の夫へのケアが不十分であったことがうかがえる。これはK氏の急な分娩室移動により、分娩進行状態や分娩室入室理由が十分に伝わっていなかった結果だと考える。その結果分娩室では一歩ひいた立ち位置でK氏への声かけの減少を招いてしまった。

これらのことから、「分娩が安全に進行していることを伝える」ことは大切であり、分娩進行状況を相手の理解度に合わせて、急に進行する時こそ落ち着いて丁寧に伝えることが必要であったと考える。また夫には分娩期の役割やケアの具体的方法の提示だけでなく、正常な分娩経過の説明も行う必要があったと考える。

しかし急激な分娩進行は予測しきれないことも多い。常にチーム連携し、チームで夫へのサポートが行えるような体制を整えておくことが何よりも大切であると感じた。

## VI. 結 論

本事例を通して、郷田ら<sup>1)</sup>の示す「夫立ち会い分娩における助産師のケア」4項目と、それに加え「分娩が安全に進行していることを伝えるケア」の大切さを実感できたと同時に、それぞれのケアの内容を考える機会となった。その内容を以下に示した。

#### 1. 「夫が無力感を持たないようなケア」

- ・ 夫の役割やケアの具体的内容の提示や助言
- ・ 夫の行うケアを認めたり褒めたり見守ること
- ・ 夫の役割を担いやすく居場所を整えること

#### 2. 「バースプランが叶えられるようなケア」

- ・ バースプランは夫婦が必要としている時期、効果的に叶えられる時期を見極めること

#### 3. 「状況に合わせて夫が休息できるようなケア」

- ・ 休息を促す声かけは陣痛で耐えている産婦を避けること
- ・ 産婦に休息をすすめる時に同時に促すこと
- ・ 休息のタイミングを夫婦で相談してもらうこと

#### 4. 「分娩の安楽が保てるようなケア」

- ・ 妊娠中からイメージリーやラマーズ法など痛みの閾値をさげるような関わりを持つこと
- ・ 産痛を肯定的に捉えられるような説明をすること

#### 5. 「安全にお産が進行していることを伝えるケア」

- ・ 急に分娩進行する時こそ、丁寧に落ち着いて行うこと
- ・ 夫にも正常な分娩経過を説明しておくこと
- ・ チーム連携し、夫をサポートしていくこと

## VII. 謝 辞

本事例をまとめるにあたり、多くの学びを与えて下さったK氏とご家族、施設の指導者の皆様に心から感謝いたします。

## VIII. 引用文献・参考文献

- 1) 郷田佳奈子, ほか: 夫立ち会い分娩における助産師のケア 山梨大学看護学会誌7巻-1号 p33-38 2009
- 2) 中島通子, ほか: 立ち会い分娩における夫の意識 山口県立大学看護学部紀要 第8号 p41 2004
- 3) 青野真歩, ほか: 分娩立ち会いが立ち会う夫の感情に与える影響-立ち会い群と非立ち会い群の比較 母性衛生 第45 4号 p530-539 2005
- 4) 三浦好美, ほか: 夫立ち会い分娩に関する夫婦の意識の違い日本看護学論文集 母性看護32回 11-13
- 5) 中島通子, ほか: 出産前教室に参加した夫の立ち会い分娩に対する意識調査 母性衛生 第46 4号 p588-597 2006